

ことばの織物

第 **2** 集

昭和短篇珠玉選

ことばの織物

第2集

和短篇珠玉選

蒼丘書林

編 者

阿毛 久芳 (あもう・ひさよし) 都留文科大学
栗原 敦 (くりはら・あつし) 実践女子大学
佐藤 義雄 (さとう・よしお) 明治大学
杉浦 静 (すぎうら・しずか) 大妻女子大学
須田喜代次 (すだ・きよじ) 大妻女子大学
棚田 輝嘉 (たなだ・てるよし) 実践女子大学
松澤 信祐 (まつざわ・しんすけ) 文教大学

ことばの織物 第2集 昭和短篇珠玉選

一九九八年十月二十日 第一刷発行

二〇〇一年四月二十日 第二刷発行

編 者 阿毛 久芳 他

発行者 石森 広明

発行所 (株) 蒼 丘 書 林
そう きゅう しよ りん

〒一八七-〇〇二一

東京都小平市上水南町二丁目一五番七号

電 話 〇四一(三三三三) 三九一四

FAX 〇四一(三三三三) 三二五六

振 替 〇〇一六〇-〇〇三八一七一

〈出版情報〉 <http://www1.odn.ne.jp/sokyu>

印刷・製本／参陽社

定価はカバーに表示してあります。

落丁・乱丁本は当社でお取替えします。

目次

ガドルフの百合	宮沢 賢治	5
監獄部屋	小林多喜二	15
押絵と旅する男	江戸川乱歩	27
風琴と魚の町	林 芙美子	57
夕景色の鏡	川端 康成	89
姨 捨	堀 辰雄	106
黒 猫	島木 健作	124
デンドロカカリヤ	安部 公房	137
歩哨の眼について	大岡 昇平	166
翼ーゴージェエ風の物語ー	三島由紀夫	177
鶴	長谷川四郎	193

質屋の女房		安岡章太郎	233
他人の夏		山川方夫	250
初心		阿部昭	258
鮒		向田邦子	276
パン屋再襲撃		村上春樹	295

ことばの織物 第2集

昭和短篇珠玉選

凡 例

●本書は先に刊行した『ことばの織物 短篇小説珠玉選』の続編として、昭和文学の珠玉短篇十六作品を採録して編んだものである。

●収録作品は、それぞれの末尾に記載する全集等を底本とした。

●配列は原則として初出発表順とした。

●作品末尾には、作者略歴・解題を付した。

●表記については、次の要領で底本の一部を改めた。

- 1 旧漢字・旧仮名遣いは新字・新仮名遣いとした。
- 2 難読漢字には必要に応じルビ（振り仮名）を付した。
- 3 明らかな誤植と認められるものは、これを正した。

ガドルフの百合

宮沢 賢治

ハックニー馬のしっぽのような、巫戯^{ふぎ}けた楊の並木と陶製の白い空との下を、みじめな旅のガドルフは、力いっぱい、朝からつゞけて歩いて居りました。

それにたゞ十六哩だという次の町が、まだ一向見えても来なければ、けはいもしませんでした。（楊がまっ青に光ったり、ブリキの葉に変^{えのぐ}ったり、どこまで人をばかにするのだ。殊にその青いときは、まるで砒素をつかった下等の顔料^{えのぐ}のおもちゃじゃないか。）

ガドルフはこんなことを考えながら、ぶりぶり憤^いつて歩きました。

それに俄かに雲が重くなつたのです。

（卑しいニッケルの粉だ。淫^えらな光だ。）

その雲のどこからか、雷の一切れらしいものが、がたと引きちぎつたような音をたてました。

（街道のはずれが急に白くなる。あそこを人がやって来る。いややって来ない。あすこを犬がよこぎった。いやよこぎらない。畜生。）

ガドルフは、力いっぱい足を延ばしながら思いました。

そして間もなく、雨と黄昏とがいつしよに襲いかかったのです。

実にはげしい雷雨になりました。いなびかりは、まるでこんな憐れな旅のものなどを漂白してしまいうそう、並木の青い葉がむしゃくしゃにむしられて、雨のつぶと一諸に堅いみちを叩き、枝までがガリガリ引き裂かれて降りかかりました。

（もうすっかり法則がこわれた。何もかもめちゃくちゃだ。これで、も一度きちんと空がみがかれて、星座がめぐることなどはまあ夢だ。夢でなきやあ霧だ。みずけむりさ。）

ガドルフはあらんかぎりすねを延ばしてあるきながら、並木のずうつと向うの方のほんやり白い水明りを見ました。

（あすこはさつき曖昧な犬の居たとこだ。あすこが少うしおれのたよりになるだけだ。）

けれども間もなく全くの夜になりました。空のあっちでもこっちでも、雷が素敵に大きな咆哮をやり、電光のせわしいことはまるで夜の大空の意識の明滅のようでした。

道はまるつきりコンクリート製の小川のようになってしまうて、もう二十分と続けて歩けそうにもありませんでした。

その稲光りのそらぞらしい明りの中で、ガドルフは巨きなまっ黒な家が、道の左側に建ってい

るのを見ました。

（この屋根は稜が五角で大きな黒電気石の頭のようなだ。その黒いことは寒天だ。その寒天の中へ俺ははいる。）

ガドルフは大股に跳ねて、その玄関にかけ込みました。

「今晚は。どなたかお出でですか。今晚は。」

家の中はまっ暗で、しんとして返事をするものもなく、そこらには厚い敷物や着物などが、くしゃくしゃ散らばっているようでした。

（みんなどこかへ遁げたかな。噴火があるのか。噴火じゃない。ペストか。ペストじゃない。またおれはひとりで問答をやっている。あの曖昧な犬だ。とにかく廊下のはじでも、ぬれた着物をぬぎたいもんだ。）

ガドルフは斯う頭の中でつぶやき又唇で考えるようにしました。そのガドルフの頭と来たら、旧教会の朝の鐘のようにガンガン鳴って居りました。

長靴を抱くようにして急いで脱って、少しびっこを引きながら、そのまっ暗なちらばった家にはね上って行きました。すぐ突きあたりの大きな室は、たしか階段室らしく、射し込む稲光りが見せたのでした。

その室の闇の中で、ガドルフは眼をつぶりながら、まず重い外套を脱ぎました。そのぬれた外套の袖を引くとき、ガドルフは白い貝殻でこしらえあげた、昼の楊の木をありありと見まし

た。ガドルフは眼をあきました。

（うるさい。ブリキになったり貝殻になったり。しかしまたこんな桔梗いろの背景に、楊の舍利がりと立つのは悪くない。）

それは眼をあいてもしばらく消えてしまいませんでした。

ガドルフはそれからぬれた頭や、顔をさっぱりと拭って、はじめてほっと息をつきました。

電光がすばやく射し込んで、床におろされて蟹のかたちになっている自分の背囊をくつきり照らしまっ黒な影さえ落して行きました。

ガドルフはしゃがんでくらやみの背囊をつかみ、手探りで開いて、小さな器械の類にさわって見ました。

それから少ししずかな心持ちになって、足音をたてないように、そっと次の室にはいつて見ました。交る交るさまざまの色の電光が射し込んで、床に置かれた石膏像や、黒い寝台や引っくり返った卓子やらを照らしました。

（こゝは何かの寄宿舎か。そうでなければ避病院か。とにかく二階にどうもまだ誰か残っているようだ。一ぺん見て来ないと安心ができない。）

ガドルフはしきいをまたいで、もとの階段室に帰り、それから一ぺん自分の背囊につまずいてから、二階に行こうと段に一つ足をかけた時、紫いろの電光が、ぐるぐるする程明るくさし込んで来ましたので、ガドルフはぎくつと立ちどまり、階段に落ちたまっ黒な自分の影とそれから窓

の方を一諸に見ました。

その稲光りの硝子窓から、たしかに何か白いものが五つか六つ、だまってこっちをのぞいていました。

（丈がよほど低かったようだ。どこかの子供が俺のように、俄かの雷雨で遁げ込んだのかも知れない。それともやっぱりこの家の人たちが帰って来たのだろうか。どうだかさっぱりわからないのが本統だ。とにかく窓を開いて挨拶しよう。）

ガドルフはそっちへ進んで行つてガタピシの壊れかかった窓を開きました。たちまち冷たい雨と風とが、ぱっとガドルフの顔をうちました。その風に半分声をとられながら、ガドルフは丁寧に云いました。

「どなたですか。今晚は。どなたですか。今晚は。」

向うのほんやり白いものは、かすかにうごいて返事もしませんでした。却つて注文通りの電光が、そこら一面ひる間のようにして呉れたのです。

「ははは、百合の花だ。なるほど。ご返事のないのも尤もだ。」

ガドルフの笑い声は、風といっしょに陰気に階段をころげて昇つて行きました。

けれども窓の外では、いっぱいに咲いた白百合が、十本ばかり息もつけない嵐の中に、その稲妻の八分一秒を、まるでかゝやいてじつと立っていたのです。

それからたちまち闇が戻されて眩しい花の姿は消えましたので、ガドルフはせっかく一枚ぬれ

ずに残ったフランのシャツも、つめたい雨にあらわせながら、窓からそとにからだを出して、ほのかに揺らぐ花の影を、じつとみつめて次の電光を待っていました。

間もなく次の電光は、明るくサツサツと閃めいて、庭は幻燈のように青く浮び、雨の粒は美しい楕円形の粒になって宙に停まり、そしてガドルフのいとしい花は、まっ白にかつと瞋って立ちました。

（おれの恋は、いまあの百合の花なのだ。いまあの百合の花なのだ。砕けるなよ。）

それもほんの一瞬のこと、すぐに闇は青びかりを押し戻し、花の像はぼんやりと白く大きくなり、みだれてゆらいで、時々は地面までも屈んでいました。

そしてガドルフは自分の熱って痛む頭の奥の、青黴い斜面の上に、すこしも動かずかゝやいて立つ、もう一むれの貝細工の百合を、もつとはつきり見て居りました。たしかにガドルフはこの二むれの百合を、一諸に息をこらして見つめて居ました。

それも又、たゞしばらくのひまでした。

たちまち次の電光は、マグネシアの焰よりももつと明るく、紫外線の誘惑を、力いっぱい含みながら、まっすぐに地面に落ちて来ました。

美しい百合の憤りは頂点に達し、灼熱の花弁は雪よりも厳めしく、ガドルフはその凜と張る音さえ聴いたと思いました。

暗が来たと思う間もなく、又稲妻が向うのぎざぎざの雲から、北斎の山下白雨のように赤く這つ

て来て、触れない光の手をもつて、百合を擦めて過ぎました。

雨はますます烈しくなり、かみなりはまるで空の爆破を企て出したよう、空がよくこんな暴れものを、じつと構わないで置くものだ、不思議なようにさえガドルフは思いました。

その次の電光は、実に微かにあるかないかに閃きました。けれどもガドルフは、その風の微光の中で、一本の百合が、多分とうとう華奢なその幹を折られて、花が鋭く地面に曲つてとゞいてしまったことを察しました。

そして全くその通り稲光りがまた新らしく落ちて来たときその気の毒ないちばん丈の高い花が、あまりの白い興奮に、とうとう自分を傷つけて、さらさら顫うしのぶぐさの上に、だまって横わるのを見たのです。

ガドルフはまなこを庭から室の間にそむけ、丁寧にがたがたの窓をしめて、背囊のところに戻つて来ました。

そして背囊から小さな敷布をとり出してからだにまとい、寒さにぶるぶるしながら階段にこしかけ、手を膝に組み眼をつむりました。

それからたまらず又たちあがつて、手さぐりで床をさがし、一枚の敷物を見つけて敷布の上にそれを着ました。

そして睡ろうと思ったのです。けれども電光があんまりせわしくガドルフのまぶたをかすめて過ぎ、飢えとつかれとが一しよにがたがた湧きあがり、さつきからの熱った頭はまるで舞踏のよ

うでした。

（おれはいま何をとりたて、考える力もない。たゞあの百合は折れたのだ。おれの恋は砕けたのだ。）ガドルフは思いました。

それから遠い幾山河の人たちを、燈籠のように思い浮べたり、又雷の声をいつかそのなつかしい人たちの語に聞いたり、又昼の楊がだんだん延びて白い空までとゞいたり、いろいろなことをしているうちに、いつかところろ睡ろうとしました。そして又睡っていたのでしよう。

ガドルフは、俄かにどんだんという音をききました。ばたんばたんという足踏みの音、怒号や嘲罵が烈しく起りました。

そんな語はとても判りもしませんでした。たゞその音は、たちまち格闘らしくなり、やがてずんずんガドルフの頭の上にやって来て、二人の大きな男が、組み合ったりほぐれたり、けり合ったり撲り合ったり、烈しく烈しく叫んで現われました。

それは丁度奇麗に光る青い坂の上のように見えました。一人は闇の中に、ありありうかぶ豹の毛皮のだぶだぶの着物をつけ、一人は烏の王のように、まっ黒くなめらかによそおっていました。そしてガドルフはその青く光る坂の下に、小さくなってそれを見上げて自分のかたちも見たのです。

見る間に黒い方は咽喉をしめつけられて倒されました。けれどもすぐに跳ね返して立ちあがり、今度はしたたかに豹の男のあごをけあげました。

二人はも一度組みついて、やがてぐるぐる廻って上になったり下になったり、どっちがどっちかわからず暴れてわめいて戦ううちに、とうとうすてきに大きな音を立てて、引っ組んだまま坂をころげて落ちて来ました。

ガドルフは急いでとび退きました。それでもひどくつきあたられて倒れました。

そしてガドルフは眼を開いたのです。がたがた寒さにふるえながら立ちあがりました。

雷はちようどいま落ちたらしく、ずうっと遠くで少しの音が思い出したように鳴っているだけ、雨もやみ電光ばかりが空を亘って、雲の濃淡、空の地形図をはっきりと示し、又只一本を除いて、嵐に勝ちほこった百合の群を、まっ白に照らしました。

ガドルフは手を強く延ばしたり、又ちぢめたりしながら、いそがしく足ぶみをしました。

窓の外の本一本の木から、一つの雫が見えていました。それは不思議にかすかな薔薇いろをうつしていたのです。

（これは暁方の薔薇色ではない。南の蜃の赤い光がうつったのだ。その証拠にはまだ夜中にもならないのだ。雨さえ晴れたら出て行こう。街道の星あかりの中だ。次の町だつてじきだろう。けれどもぬれた着物を又引っかけて歩き出すのはずいぶんいやだ。いやだけれども仕方ない。おれの百合は勝ったのだ。）

ガドルフはしばらくの間、しんとして斯う考えました。

宮沢賢治（みやざわ・けんじ）明治29年岩手県花巻市（現在）に、質・古着商を営む父政次郎母イチの長男として生まれる。盛岡中学入学後、短歌創作をはじめ。卒業後、島地大等編『漢和対照妙法蓮華經』を読み感動。大正4年、盛岡高等農林学校農学科第二部（農芸化学科）入学。翌年同人雑誌「アザリア」創刊。卒業後、研究生として稗貫郡土性調査に従事。大正9年、日蓮主義の在家宗教団体国柱会に入会。この年童話「貝の火」を書いたといわれる。翌年家の改宗容れられず無断上京。筆耕校正で自活し、国柱会で奉仕活動に従事、文芸による布教を目指す。晩夏、妹病気の報に帰郷。童話を書き始める。12月、郡立稗貫農学校教諭となる。11年、心象スケッチを書き始める。11月27日、妹トシ死去。12年8月、北海道・樺太旅行、挽歌群を書く。13年4月、心象スケッチ集『春と修羅』刊行。12月、イーハトブ童話集『注文の多い料理店』刊行。このころ多くの童話を創

作。15年3月花巻農学校退職、独居自炊の農耕生活に入る。肥料設計所を設け、稲作指導をする。

昭和3年6月、東京を経て大島旅行。8月稲作不良を心配して奔走、病に倒れる。一時快癒後、文語詩の創作を始める。6年東北採石工場技師になり、炭酸石灰の改良と販売に従事。9月、東京で発熱病臥。帰郷後、心象スケッチ・童話等に手入れ。8年8月、「文語詩稿 五十篇」「同 二百篇」清書。9月21日死去。『新校本宮澤賢治全集』（筑摩書房、全16巻別巻1）がある。

【解題】本篇は、生前未発表。没後の全集に初出。本文は、『新校本宮澤賢治全集』に拠った。本篇の発想の原形は、「いなぎかりまたむらさきにひらめけばわが白百合は思ひきり咲けり」「空を這ふ赤き稲妻わが百合の花はうごかずましろく怒れり」など「歌稿」192、196の短歌に認められる。この短歌に「恋」のモチーフが導入され、メタフィジカルな作品として成立している。